



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「おっさんたちの旅」 鎌倉②

もう一度出演者を紹介しておこう。

カースケB : (インド大魔王)

現在は、極小の旅行会社代表。

グズ六B :

現在は、なぜか鎌倉の豪邸に住んでいる。

オメダB :

現在は、インド人(日本企業社員)に日本語を教えている。

鎌倉詣の直接動機は、グズ六Bが「東京湾に沈められることなく、豪邸に住んでいるって本当かな?」ということであった。

そもそも、この話には前段があった。わが輩の学友M(鳥取県米子市)は、山陰中央新報社の記者であった。その彼が支社長として大阪にやってきた。それで、たびたび食事をするようになったが、「同窓会をやろうよ」と、わが輩にけしかけてきた。わが輩が幹事をやれというわけである。

(そんなにやりたければ、あんたが幹事をやればいいじゃないか・・・)

「君が呼びかけたら、みな集まるよ」

正直に言えば、過去を振り返る同窓会に興味がなかった。さきざきに面白いことがゴロゴロあったからである。それに彼の魂胆は分かっていた。学生時代に恋心があった元女学生に会いたかったのである。それで、長い間放置していた。ところが、その彼がガンで急逝してしまった。こんなに早く逝くなら、願いを叶えてやれば良かった、と後悔の念が湧いてきた。

そのことをオメダBに伝えると、「同窓会をやろう!」ということになった。哲学科は、ドイツ語とフランス語を履修する二グループに別れ、どういうわけか、慣習的にオメダBとわが輩の二人が幹事役をすることになっている。

第一回目の同窓会を開くことになった。

さて、グズ六Bが行方不明だと分かった。どうやら「東京湾に沈められているらしい」という噂があった。しかし、オメダBがその生存を確認した。隠れて生きていた。

同窓会で、それぞれの人生行路を語ったが、暗夜行路の者が数名いた。公安から逃げ回って、ついに35歳で出頭した者、巣鴨刑務所に収監され、まともに就職できなかった者たち、事業に失敗して一億の借金を背負った者などである。掃きだめ（の哲学科）に鶴はいなかった。もちろん、グズ六Bも暗夜行路の一員だが、そのグズ六Bが“豪邸”に住んでいる、ということは、彼は鶴なのか。いや、そうとは言えない。彼曰く、二億の借金があったと言う。（借金取りから逃げ回っていたのか・・・）

わが輩もヤミ金融業者から逃げていると思った。その借金の隠し金で“豪邸”に住んでいると邪推したが、全く違った。残念ながら、これ以上グズ六Bの豪邸について語ることはできない。

グズ六Bは、三島由紀夫の盾の会と関係があった。三島が市ヶ谷の自衛隊駐屯地に立てこもり、割腹自殺した事件があった。その一週間前に、森田必勝はじめ四人のメンバーとお茶ノ水駅の喫茶店で同席したと言う。そのとき、まさか決行するとは思ってもみなかった。

この事件の秘密に関連して、「東京湾に沈められた」とも邪推したが、それも的外れであった。

借金でもなく、盾の会の秘密でもなく、犯罪行為でもなく、一体どうしてなのか、と読者諸氏は訝るが、わが輩としては、今は事実を言えない。あと十年後なら言えそうである。

グズ六Bを擁護するわけではないが、彼は右派ながら“壮士風”の男である。おそらく真つ当な人生を歩んできたであろう。二億円の借金も、要するに商売ベタ、実直な性格によるものだと思う。

今回分かったことだが、グズ六Bは卒業していなかった。しかし、彼は知的旺盛な男であった。文芸評論家小林秀雄（1902-1983）を敬愛していたようである。小林は最晩年まで鎌倉に住んでいた。それでグズ六Bは秘密の居を鎌倉にしたのかもしれない。彼の妻も知的な女性で、小林の講演テープを大音量で聞くので近所が迷惑している、とグズ六Bは愚痴を言っていた。

わが輩は小林の名前は知っていたが、著作を読んだことも、関心をもったこともなかった。グズ六B夫婦が、小林の思想のどこに魅力を感じていたのか、聞き洩らした。

グズ六Bは、宗教学者山折哲雄のファンで、15冊ほどの蔵書がある。

山折は、鎌倉は「京都と同じで、呪われた都でした」と述べている。

さて、その呪われた都・鎌倉をグズ六Bが案内してくれる。

わが輩は「呪われた」の意味が分からなかった。さてさて、だれが誰を、どのようにして呪うのか。その呪いを解く方法と場所があるのか。今のところわが輩には分からない。

今のところ分かったのは、グズ六Bがヤミ金に呪われていなかった、ということである。いや、待てよ。大手銀行からは呪いの言葉を吐かれた、これは確かかもしれない。

（注）「掃きだめの哲学科」と表現したのはグズ六Bである。優等生のグズ六Bが入学したら、わが輩のような愚学生がごろごろいた。スポーツ推薦の学生が教室の後方でたむろしていた。就職に不利なのに、なぜ大学当局は哲学科に押し込んだのか、七不思議である。勉強しなくても卒業できる学科だと思ったのであろうか。卒業のとき、少数だが優れた哲学徒がいたことを知って、遊人のわが輩は愕然としたことがある。